

【コラム】戦争の時の学生に関わる出来事

昭和 19(1944)年に政府は都市部がアメリカの爆撃機による空襲目標にされやすいことから、都市部の学童(児童)を農村部に移すことを決定しました。これを学童疎開と言います。学童疎開には、親戚や知人を頼る縁故疎開と、学校でまとまって疎開する集団疎開がありました。集団疎開の対象となった学童は国民学校 3 年生から 6 年生までで、縁故疎開ができない子どもたちです。集団疎開は保護者の申し出によって行われ、その費用を一部保護者が負担しました。費用負担できない子どもや病弱な子どもは対象から外され、東京に残って生活をしました。

都留でも疎開児童を受け入れました。昭和 19(1944)年には麴町国民学校(現東京都千代田区)5、6 年生の生徒を受け入れました。児童らは都留に到着後、谷村町の見学、お城山の遠足、農作業などを体験したようです。また疎開児童への食料は少ないながらも地元の婦人会、少年団や青年団から提供されたようです。麴町国民学校児童 237 名は谷村地区の各旅館に分かれて滞在しました。

滞在した地区	滞在した旅館	人数
新町	弁達旅館	50 名
上町	桂楽荘	50 名
早馬町	ますや	30 名
早馬町	みどりや	30 名
下町	内藤旅館	30 名
横町	弘三館	30 名
田町	山本館	20 名

また、境の天野家では昭和 19(1944)年 8 月～9 月に疎開した暁星小学校(東京都千代田区)の児童 70 人、先生 4 人、寮母 7 人、用務員 1 人を受け入れています。

集団疎開では、親類が面会に来て、別れる時のつらさはひととき大きかったようです。天野家への面会者の見送りは、村の境界である境橋までという決まりがあり、当時、境橋はお別れ橋と呼ばれていたようです。

また、寒さの厳しい冬の間、児童の 1 人が、風邪がもとで亡くなり、先生が遺体をリヤカーに乗せ、悲しみに耐えて火葬場まで歩いたという記録もあります。

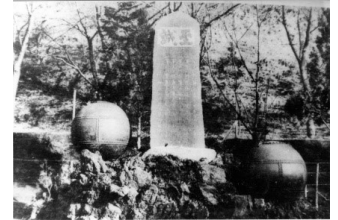
博物館を活用した夏休み自由研究プロジェクト



—都留・平和のための戦後 80 年展—

「都留市内の戦争遺跡を訪ねてみよう」

1.護国神社(都留市中央3丁目)



出典 都留文科大宇地域交流センター・ミュージアム都留

昭和 7 年(1931)の頃の軍人勅語 両側にあるのは日露戦争時の機雷。太平洋戦争時に金属供出された。

・都留市護国神社由来の碑

本神社は大正 8(1919)年に帝国郷軍人会谷村町分会が昭和 大戦顕彰碑建立の場所に谷村町忠魂殿を造営して、西南戦争・日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦の戦没者を祭神として谷村町に移管した神社です。昭和 3(1928)年に山崩れで本殿がつぶれたため、現在の場所に新しく建立しました。

太平洋戦争が終結してからは GHQ の方針で町当局から分離されたため、旧軍人による谷村町靖国戦友会、戦傷者遺族等援護連盟谷村町分会の有志で管理をしていました。昭和 29(1954)年に市制がしかれてから援護会都留市連合会が結成され、管理するようになりました。

・昭和 大戦顕彰碑

昭和 29(1954)年に建立された日中戦争、太平洋戦争戦没者を記した碑です。339 人の名前が刻まれています。

・軍人勅語 日露戦争時の機雷(機雷は水中に敷設され、艦船が接近すると爆発する兵器)を祀っていました。

まんしゅうみなみつるぶんそんじゅんなん ひ
2. 満州南都留分村殉難の碑（都留市中央3丁目9-8 仲町大神社境内内）



出典 都留文科大学地域交流センター・ミュージアム都留
開拓団の様子

昭和17（1942）年に、道志村の佐藤伝長氏が団長となり昭和20年まで団員442人が都留を含む郡内地域から中国の満州へ入植しました。この一団を「南都留郷広富山開拓団」といいます。昭和20（1945）年5月まで次々と渡満し、保健診療所や在満国民学校も開設され、最終的に開拓団の人口は156戸、620名となりました。しかし、ソ連の参戦、日本の敗戦で開拓団は壊滅し、現地農民の襲撃、寒さや栄養不良によって団員は次々と亡くなりました。

ソ連軍が満州に侵攻すると、関東軍は開拓移民を置き去りにして逃亡しました。ソ連参戦時の「満蒙開拓団」在籍者は約27万人であり、そのうち「根こそぎ動員」者4万7000人を除くと開拓団員の実数は22万3000人、その大半が老人、女性、子供であったようです。男手を欠いた開拓移民は逃避行に向かい、その過程と難民生活で約8万人が死亡したそうです。敗戦時に旧満州にいた日本人は約155万人といわれていますが、その死者20万人の4割を開拓団員が占めます。また残留孤児など、現地に多くの取り残された日本人がいました。

昭和21（1946）年4月にはハルビンの花園收容所に移動しましたが、ここでも多くの団員が亡くなりました。同年9月末、ようやく第1陣が帰国できることとなり、帰国してきた元団員たちは、開拓広富山会を組織して、仲町大神宮境内に慰霊碑を建立し、昭和37（1962）年当時の都留文科大学学長であった諸橋徹次先生の選文により、11月3日の第17回慰霊祭にあわせて、除幕式を行いました。この碑には碑文と共に、当時確認できた死者264名の名前が刻まれています。

ほじゅいん かんのん
3. 保寿院（都留市四日市場439） アツツ観音



出典 都留文科大学地域交流センター・ミュージアム都留
山崎 保代 氏

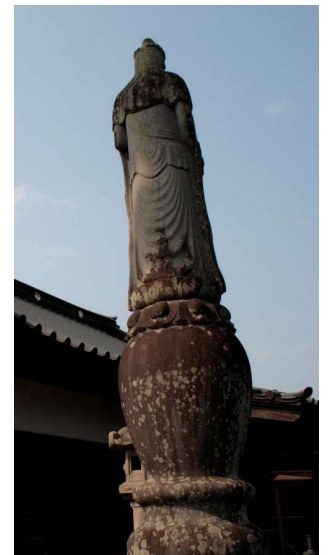
都留市四日市場の保寿院境内にアツツ観音が建立されています。昭和29（1954）年に作られました。アツツ島で玉碎（日本軍が、勝算のない状況で降伏を拒否し、部隊が全滅するまで戦い続けた状況）した山崎保代部隊長の父親である小宮山洞岳氏によって建てられました。戦争で「玉碎」という表現が使われたのは、アツツ島の戦いがはじめてでした。この戦いによる日本軍の損害は戦死2,638名、捕虜は27名で生存率は1パーセントに過ぎませんでした。アメリカ軍損害は戦死約600名、負傷約1,200名でした。

アツツ島までは日本から約3000キロの距離があります。アリューシャン諸島に位置する寒い気候のアツツ島ですが、「南東のイメージ」があるらしく、暖かい地方だと思っている方も少なくないようです。

山崎部隊長は明治24（1891）年四日市場生まれ。県立二中、陸軍幼年学校、士官学校を出て、中国大陆に転戦しました。アツツ島には、戦死の1ヵ月前に転任ばかりでした。出発にあたり郷里に遺髪と遺書を託したようです。

観音像の脇に「部隊の長として遠き不毛に入り 骨を北海の戦野に埋む 真に本懐に存じ候 況や護国の神霊にして悠久の大義に生々快なる哉 山崎大佐」と遺書が刻字された石碑が、平成6（1994）年に当時の住職である小宮山明三氏によって建立されています。

ちなみに、アツツ観音はアツツ島の方角を向いているそうです。



アツツ観音（後ろから撮影）